

**F/T13**  
FESTIVAL/TOKYO

ARTS  
COUNCIL  
TOKYO



東京文化発信  
プロジェクト



TOKYO ● 2020

**ガネーシャ VS. 第三帝国 / バック・トゥ・バック・シアター**  
演出：ブルース・グラッドウィン

**Ganesh Versus the Third Reich / Back to Back Theatre**  
Direction: Bruce Gladwin

12.6 (Fri) - 12.8 (Sun)

東京芸術劇場 プレイハウス  
Tokyo Metropolitan Theatre, Playhouse



## インタビュー：ブルース・グラッドウィン

### バック・トゥ・バック・シアターの演劇の冒険

——バック・トゥ・バック・シアターの4人目のアーティストック・ディレクターとして、あなたの目から見た、カンパニーの特色を教えてください。

バック・トゥ・バック・シアターには長い歴史があり、私がかかわる以前から、演劇的な革新性を探求していました。私がディレクターになったのは1997年でしたが、その当時はまだ、知的障害者の俳優が演劇をつくるというコンセプト自体が、珍しく、チャレンジングなことでした。とはいえ、私たちは設立当初から、常にプロフェッショナルであることを目指して活動してまいりました。俳優たちは、ボランティアとしてではなく、プロフェッショナルとして劇団から雇われていますから、その意味では最初からプロであったということもできます。そして、オーストラリアの観客の支援を受けつつ、次第に新しく実験的な演劇をつくる集団として、世界的に評価、認知されるようになりました。

私たちは特に、障害をテーマにした作品をつくってはいません。主にテーマに取りあげられるのは権力の濫用、操作、他者への共感や悪意といったものです。もちろん俳優たちが障害を持っていることは明らかですが、それを大きくメッセージとして取りあげることはありません。私にとって彼らは、オーストラリア中でもっとも優れた俳優で、だからこそ私はここで働きたいと思っている。それに、私は、あらゆる観客に向けた、普遍性のある作品をつくりたいと考えているんです。小さなコミュニティ

に向けた、迎合的な作品づくりを考えたことはありませんし、俳優たちもそれを嫌うでしょう。私がディレクターになった時、俳優たちに「君たちは何がしたい?」と尋ねてみました。すると彼らは「世界に向けた作品をつくりたい」と答えました。それで私たちは目的に向け、活動を続けてきたのです。

#### 「上演できない」という上演

——『ガネーシャ VS. 第三帝国』の創作プロセスはどのようなものでしたか。

5年半ほど前、私たちはテキストを使わないパフォーマンスについて考えていて、たくさんの絵を描いていたんですが、当時所属していた俳優の一人が、インドの神、ガネーシャに夢中で、その絵をいつまでも描き続けていたんです。ちょうど同じころ、マイクを使った声の実験で大きく堂々とした低い声の出し方を見つけました。すると、俳優のソニアがそれを使ってネオナチ風のスキンヘッドのキャラクターを演じ始めました。そこで私たちは、この二つの特徴のあるテーマについて、Googleで検索し、ナチスが、インドの幸福の象徴であった「卍」を使ったという事実を知りました。そこから、ジョーゼフ・キャンベルの『英雄と輪廻』を参照しつつ、ガネーシャが「卍」を取り返すため、ナチスドイツを旅するという物語が生み出されたのです。

ただ、その時点では「これはとても私たちの手に



© Jeff Busby

は負えない、この作品を発表することはできない」と私は思いました。ホロコーストというとても繊細な事柄を扱うことはもちろん、誰がユダヤ人を演じられるのか、その権利があるのか、ヒンドウーの神を扱うことが文化的に適切なのか……複雑な問題がそこにあったのです。

一方『フード・コート』という作品のヨーロッパツアーで、多くの観客やフェスティバル・ディレクターと「誰がこの作品の作り手なのか。俳優たちの創作か、それとも彼らはやらされているのか」といったことを繰り返し議論したことも、この作品には強く影響しています。俳優たちをめぐる搾取の問題は、確かに意義のあるものでした。それで、劇団内の創作の様子をフィクション化した舞台を考えました。誰が意見を言えて、誰が意見を言えないのか、操作とは何か、組織の代表とはどのようなものか、つまりは「権力」を扱った作品です。それが最終的には、インドの英雄の旅の物語と合わさって、その壮大な物語を「上演できない」と考えていることを上演する作品になったわけです。

—— 確かに本作は、単なるファンタジーでも、バックステージのものでもありません。その二つの要素が交錯することで、互いが互いの批評となり、よりドラマティックな効果を生み出していると思います。特にファンタジーとしてのガネーシャの物語は、視覚的にも美しく、イマジネーションをかき立てます。

二つの場面を交互に見せるアイデアは、あるワークショップでプラスチック素材の使い方を試したことから思いつきました。舞台上にカーテンのようにそれを吊るし、照明を当てて光の加減を試し、そこからシルエットを使った場面のアイデアも思いつきました。こうした効果は、アジアからヨーロッパまで、人間と神の領域を行き来する荒唐無稽な物語を舞台上で実現するための重要な要素になりました。

ちょっと分かりづらい言い方もかもしれませんが、私はファンタジーがもつ根拠のなさが好きです。ファンタジーはとても重要なものですが、今は多くのコンテンポラリーシアターがミニマルな語りばかり気をとられてしまっている気がします。ガネーシャの物語はとてもシンプルで、同時にさまざまなレベルの事柄を内包しています。力不足のヒーローである彼が、旅を終えて家に帰るためには、問題を解決しなくてはならない。そうした状況は私たちにも身近なもので、たとえば父母との葛藤といったものに端を発してもいます。

—— 具体的な場面、台詞はすべて即興からつくられているのでしょうか。

たとえば、ナチスのもとで人体実験を行った医師、ヨーゼフ・メンゲレがガネーシャを尋問する場面のように、ある程度のリサーチやディテールの書き込みが必要な場合は、私が書くこともあります。実際、彼の収容所での人間関係や、障害者や双子



© Jeff Busby

に寄せた執着については、たくさんの本を読んで研究しました。とはいえ、多くの場合は、即興からできてきたアイデアを何度も試し、俳優たちに合うかどうかを確かめながら、作品は組み立てられます。

### 俳優たちが体現する「演劇」への問い

——バック・トゥ・バック・シアターは、劇場にとられない、サイト・スペシフィックな作品上演でも知られるカンパニーですが、本作はいかにも「演劇」らしい劇場空間を前提にしてつくられています。

大きなオーディトリウムや舞台と客席を隔てる幕、といったものを、私たちは怖れてきました。ですから、劇場内での公演ということ自体が、本作における私たちのチャレンジでしたし、それはうまくやり遂げられたと思っています。バック・トゥ・バック・シアターの俳優たちは、典型的なトレーニングを受けた俳優のように振る舞うことはできません。大声を張り上げ、劇場の後方にまで届けるような

演技をすることはできないし、自分たちがそこで語ることがどのような結果をもたらすのかも、はっきりとは把握していません。彼らはもっと、ギリギリのところまで演技しているのです。ですから、上演には常に観客の期待を裏切り、かえって障害への理解を阻害してしまうのではないかという不安が伴います。しかし、だからこそ、典型的な劇場と彼らの間には、シェイクスピア、チャーホフ、イプセンといった偉大な演劇の歴史の中で問われ続けてきた「俳優はいかにあるべきか」という問題が浮かび上がるのです。「俳優がリアルである」とはどういうことか。それは演劇そのものの信憑性への問いでもあります。確かに俳優たちを見て、観客は「大丈夫だろうか、この作品はさっとうまくいかない」と思うかもしれない。しかし、複雑な構成、形式と内容の融合そして、この問いかけこそが、この作品を豊かにし、観客の心を動かすのです。

——本作はヨーロッパを中心に高い評価を得てきましたが、日本ではどんなふうを受け止められるの

でしょう。ご自身ではどんなことを期待されていますか。

この物語はヨーロッパ中心の視点から描かれていると思います。たとえば「卍」一つとっても、アジアにはさまざまな解釈があるにもかかわらず、われわれはそれをナチスドイツのシンボルとして扱っているわけです。

ニューヨーク公演の時、私は一人の僧に会いました。彼は私に日本についての話をしながら、日本の地図を開いてみせてくれました。その地図のいたるところに「卍」が書込まれていました。あれは寺のシンボルなんですね。また、インドのヒンドゥーの人々は、初めのうちこの作品に懐疑的でした。その時彼らは寺に「卍」を掲げることの難しさについて話していました。ナチスとの関連でそれを批判する人たちがいるからです。日本の人たちがヨーロッパ的な見方をよく知っていて、理解していることも知ってはいますが、今回も何か、非ヨーロッパ的な、私たちは異なる物語の解釈があるかもしれないと思っています。

こうして他者を理解し、共感し、異なる文化を吸収していくことは大切です。そうして私たちは自分が何者であるかを学び、他者を理解するとはどう

いうことなのかを知るのです。文化の発信基地である日本、その中心にある東京に行くこと、そしてそこでどのような議論がわき起こるのかを、とても楽しみにしています。また、そうしたダイナミズムの中で、この作品を上演できることをとても嬉しく思っています。

(2013年2月28日オーストラリア、ジーロングにて/  
取材・翻訳：楢山由香 構成：鈴木理映子)

#### ブルース・グラッドウィン

演出家、デザイナー、作家として実験的な演劇制作に携わる。1998年、アリーナ・シアター・カンパニーとの協同作品「人類三部作」でのテクノロジーと演劇のダイナミックな融合で注目を集める。99年、同作での創造性あふれる斬新で実験的な新しい演劇言語を生み出そうとする取り組み



© Jeff Busby

で、アシテジ国際児童青少年演劇協会国際名誉協会長賞を受賞。バック・トゥ・バック・シアターでは、『メンタル』(99年)、『ドッグ・ファーム』(2000年)、『ソフト』(02年)、『スモール・メタル・オブジェクト』(05年)、『フード・コート』(08年)、『ガネーシャ VS. 第三帝国』(11年)を演出している。

#### 関連企画 F/T×東京芸術劇場ユース・プログラム

F/Tのメイン会場である東京芸術劇場とF/Tの共同企画として、バック・トゥ・バック・シアター (BTB)のメンバーの生の声を聞く機会が実現。

##### ◎ユース・ワークショップ

日時：12月10日(火) 15:00～17:00/会場：東京芸術劇場リハーサルルームL

講師：ケイト・スーラン (BTBショー・ディレクター)、サイモン・ラフティ (BTBアンサンブルメンバー)、アリス・フレミング (BTBステージ・ディレクター)

対象：15～20歳の障害の有無に関わらずパフォーマンス・アーツを志す若手のアーティストおよび、パフォーマンス・アーツに興味のある方  
定員：20名(先着順)／受講無料・要Web申込み ※逐次通訳あり

##### ◎シンポジウム 「歴史・欠落・創造 —『ガネーシャVS.第三帝国』を巡って」

日時：12月11日(水) 19:00～21:00/会場：東京芸術劇場リハーサルルームL

パネリスト：ケイト・スーラン (BTBショー・ディレクター)、サイモン・ラフティ (BTBアンサンブルメンバー)、アリス・フレミング (BTBステージ・ディレクター)、ピーター・エカソル (メルボルン大学演劇学講師)、今日マチ子 (漫画家、イラストレーター)、保坂健二郎 (東京国立近代美術館主任研究員) 司会：鴻 英良 (演劇批評家)

定員：80名/料金：1000円(『ガネーシャVS.第三帝国』の観劇チケットをお持ちの方は500円)・要Web予約 ※逐次通訳あり

お申込み・予約方法ほか詳細はF/Tウェブサイトをご覧ください。

お問合せ：フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 tel:03-5961-5202 / <http://festival-tokyo.jp/>

## 俳優たちが答える バック・トゥ・バック・シアター

### ・今までミスをしたことはありますか？

サイモン 小学生のとき、病気で病室にいました。私は誰かが来て話をしてくれるよう、ボタンを押したつもりでしたが、代わりに防犯ベルを押してしまいました。

スコット いつもです。ミスは数え切れないほどあります。過去のすべてはヘマです。その膨大なリストを挙げたくはないです。自分の恥ずかしいことの山を見たくないです。

### ・上演の終了をどのように知りますか？

ニッキ それについて考え、しゃべるのをやめます。  
サラ 終わったときまたは終わりのようだと思えたときです。満足と自信を感じなければいけません。  
スコット その選択が未来に影響します。これらの選択は公演を形づくれます。私たちは、いつ終わるのかどのように何をするかを決めます。それが最低ラインです。公演が良かったかどうかは観客が教えてくれます。

### ・どんな演劇を観るのが好きか教えてください。

ブライアン 僕を魅了してくれる演劇を見ます。  
ニッキ 人々を笑わせるものが好きです。輪っかを飛び越える動物や魔法のトリック、ジャグリングが好きです。  
マーク みんなはショーと演劇を観ます。観て遊ぶ。  
スコット 差別をせず同時に頂点を越える演劇が好きです。物議を醸すものです。正直なところ、ちょっとしたコメディも好きです。

### ・何を見るのが好きですか？

スコット ノーコメントです。その質問は下品です。

### ・どんなことにショックを受けますか？

ブライアン 幸運なことにそんなに多くありません。  
ニッキ 人が妊娠したときにショックを受けます。なぜなら私は子供は好きですが、生まれてくる瞬間は好きではないからです。  
サラ 血、長くて幅のある廊下、緑の大理石や床の汚れ。



最近の稽古風景。左からサラ、ブライアン、サイモン、ブルース、マーク © Jeff Busby

マーク Kマート。

### ・どのように演じるものを選ぶのでしょうか？

ブライアン 想像です。自分たちの想像力を使います。

サラ アイデアの表現を通してです。異なるアイデアを展開し、異なるシナリオのもとで動きます。

### ・台本と舞台美術、どちらを優先しますか？

ブライアン 正直なところどちらもです。

サイモン 台本が先です。

スコット まさに自分たちがやっていることにもとづいています。言葉を書き出し、板の上で即興的にやってみます。美術に関しては、クルーがやりたいように、彼らが好きなようにデザインします。

### ・舞台上であなた方と同じ名前の登場人物をときどき演じますが、あなたと登場人物は同じですか？

ブライアン そうだと言わざるを得ないです。

サラ いいえ。舞台上にいるときはいつも違うワールドにいます。

スコット 自分のキャラクターは選べません。事実、他人が台本を書いています。私が言えることはそれだけです。

“We're People Who Do Shows' Back to Back Theatre PERFORMANCE POLITICS VISIBILITY”  
Edited by Helena Grehan and Peter Eckersall より

演出：ブルース・グラッドウィン  
出演：マーク・ディーンズ、サイモン・ラフティ、スコット・ブライス、  
ブライアン・テリール、デイヴィット・ウッズ  
協同創作：ブルース・グラッドウィン、マーク・ディーンズ、  
マルシア・ファーガソン、ニック・ホランド、サイモン・ラフティ、  
サラ・メインワリング、スコット・ブライス、ケイト・スーラン、  
ブライアン・テリール、デイビット・ウッズ  
照明デザイン：アンドリュー・リビングストーン  
舞台美術：マーク・カフバートン  
デザイン&アニメーション：リアン・ヒンキリー  
作曲：ヨハン・ヨハンソン  
衣裳：大谷 汐  
協力：オーストラリア・アーツ・カウンシル、アーツ・ヴィクトリア、メルボルン・  
フェスティバル、マルトハウス劇場、メルボルン市、シドニー・メイヤー・ファ  
ンド、キール財団、キット・ダントン・フェローシップ2009、ナショナル・シア  
ター・スタジオ（ロンドン）、ジーロング・パフォーミング・アートセンター、ドイ  
ツ文化センター

#### 東京公演スタッフ

技術監督：寅川英司+鴉屋  
技術監督アシスタント：河野千鶴  
舞台監督：渡部景介  
演出部：本多 桜  
小道具コーディネーター：長谷川ちえ  
照明コーディネーター：佐々木真喜子（株式会社ファクター）  
音響コーディネーター：相川 晶（有限会社サウンドウイーズ）  
衣裳管理：安達七佳  
字幕：幕内 覚（舞台字幕/映像 まくうち）  
字幕・翻訳：エグリントンみか  
通訳：石井園子、エグリントンみか、横田佳代子

記録写真：石川 純  
記録映像：株式会社彩高堂「西池袋映像」

#### F/Tスタッフ

制作統括：武田知也  
制作：楢山由香  
制作アシスタント：目澤美裕子  
フロント運営：保坂綾子  
プログラム・ディレクター：相馬千秋

ユース・アート・マネジメント・プログラム（YAMP）：  
伊藤羊子、今井美希、作田飛鳥、守山真利恵

助成：豪日交流基金  
後援：オーストラリア大使館  
主催：フェスティバル/トーキョー

フェスティバル/トーキョー13における「ガネーシャ VS. 第三帝国」東京公演  
は、外務貿易省の一部である豪日交流基金を通じてオーストラリア連邦政府  
の助成を受けています。

Direction: Bruce Gladwin  
Cast: Mark Deans, Simon Laherty, Scott Price, Brian Tilley,  
David Woods  
Devisors: Bruce Gladwin, Mark Deans, Marcia Ferguson,  
Nicki Holland, Simon Laherty, Sarah Mainwaring, Scott Price,  
Kate Sulan, Brian Tilley, David Woods  
Lighting Design: Andrew Livingston  
Design Construction: Mark Cuthbertson  
Design & Animation: Rhian Hinkley  
Composer: Johann Johannsson  
Costume Design: Shio Otani  
Supported by the Australia Council for the Arts, Arts Victoria,  
Melbourne Festival, Malthouse Theatre, City of Melbourne,  
Sidney Myer Fund, Keir Foundation, 2009 Kit Denton Fellowship,  
the National Theatre Studio (London),  
Geelong Performing Arts Centre and Goethe-Institut

#### Tokyo Performance Staff

Technical Manager: Eiji Torakawa + Karasuya  
Assistant Technical Manager: Chizuru Kouno  
Stage Manager: Keisuke Watanabe  
Stage Assistant: Sakura Honda  
Prop Co-ordination: Chie Hasegawa  
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki(Factor Co., Ltd.)  
Sound Co-ordination: Akira Aikawa(Sound Weeds Inc.)  
Dress: Nanaka Adachi  
Surtitles: Satoru Makuuchi  
Translation, Surtitles: Mika Eglinton  
Interpretation: Sonoko Ishii, Mika Eglinton, Kayoko Yokota

Photographer: Jun Ishikawa  
Video Documentation: Saikoudo Co., Ltd.

#### F/T Staff

Production Manager: Tomoya Takeda  
Production Co-ordinator: Yuka Sugiyama  
Production Assistant: Fuyuko Mezawa  
Front of House: Ayako Hosaka  
Program Director: Chiaki Soma

Youth Art Management Program (YAMP):  
Yoko Ito, Miki Imai, Asuka Sakuta, Marie Moriyama

Supported by Australia-Japan Foundation  
Endorsed by Australian Embassy  
Presented by Festival/Tokyo

The tour of Ganesh Versus the Third Reich to Tokyo for Festival  
Tokyo 2013 is supported by the Australian Government through  
the Australia-Japan Foundation which is part of the Department of  
Foreign Affairs and Trade.



ARTS  
VICTORIA



## フェスティバル/トーキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長
樋川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長 (50音順)

## フェスティバル/トーキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末弘昌	豊島区文化工部局長
委員	八巻規子	豊島区文化工部局文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井和幸	北澤尚登 (骨董通り法律事務所)

## フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、 桐山由香、高橋マミ、戸田史子

## 公募プログラムコーディネート

メディア戦略・広報	小山ひとみ
メディア戦略・広報アシスタント	松本花音
オープン・プログラム	北沢聡子、田村かのこ
オープン・プログラムアシスタント	藤井さゆり
票券	田野入涼子、後藤天
票券アシスタント	長原理江
チケットセンター	菅原淳、伊指敏
総務	佐々木由美子、佐藤久美子
経理	葦原円花、一色壽好
	堤久美子、青木亮子

## 技術監督

技術監督アシスタント	寅川英司
照明コーディネーター	河野千鶴
音響コーディネーター	佐々木真真子 (株式会社ファクター) 相川晶 (有限会社サウンドワークス)

## アートディレクション+デザイン

ウェブサイト	アジール (佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆)
パブリシティ	濱田真一+北島謙子+重松信 (株式会社フロフトワーク)
海外広報・翻訳	平昌子、望月章宏
物販	アンドリュース・ウィリアム
編集・執筆	渡辺淳 鈴木理映子

## 主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会

東京都・豊島区・アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場 (公益財団法人東京歴史文化財団)・公益財団法人としま未来文化財団・NPO法人アートネットワーク・ジャパン  
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター  
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、ブルームバーグ エル・ピー  
助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

後援：外務省、公益社団法人日本芸術家連盟団体協議会  
特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東京鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、チャコト株式会社  
協力：東京商工会議所豊島支店、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋イベント推進協力会、池袋ホテル会  
メディアパートナー：ART IT、J-WAVE 81.3 FM、新潟、CINRA.NET、美術手帖  
ホテル/パートナー：サンシャインシティプリンスホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、サウラホテル池袋  
地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まちづくり  
宣伝協力：株式会社ホステス・ハリス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート (公募プログラム)  
会場協力：アサヒ・アートスクエア (公募プログラム)  
認定：公益社団法人企業メセナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

【会期】平成25年11月9日(土)～12月8日(日)

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：石井菜保子、伊集院萌、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾壺沙美、今井美希、榎村真、大田 久、緒方真由、紙 弘香、川又美樹、栗田知宏、奥水すみれ、崔 瀟、作原飛鳥、佐藤成行、澤田 隆、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、菅川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花鈴、嵯 朝美、嶋久美、三浦彩歌、水野美奈、守山真利恵、山崎 倫、山本美幸、吉田恭大、吉田由貴

F/T/ML：青木奈々絵、青木由香、青柳佳代子、阿原乃里子、別荘真由子、館森明香、五十嵐結子、石川世梨、石川拓夫、堀又義雄、今泉友来、岩城春寿、大原尚子、大嶋純子、大津佑子、大村真央、大和田真未、岡本静華、小野寺あす子、小野菜津美、鐘味佳代、片桐根子、加藤真帆、加藤佑麻、金子環美、川島佳子、桐谷佳美、工藤芽咲、桑島剛史、鷲宮衣子、小平怜奈、五藤 真、後藤真哉、小林淳平、齋藤 利央子、崎濱梨枝、佐藤裕香、佐藤直子、染田 光、清水裕加里、齋宮真子、杉崎由佳、鈴木明子、鈴木朋子、岡島悠生、平里梨香、平 七海、平高信隆、高橋 類、高松童子、蓮川向子、竹之内さやか、竹之内麻子、田中佑、手塚 哲、寺元奈津美、照沼詔尊、戸塚 碧、藤田知子、ドラクサンゼン、中村直樹、中村光子、中村優子、中野野斗、西本健吾、平松里子、広田 牧、藤田 輝、藤林まきら〜、ブリット、コナー、古庄美和、堀越時芽子、溝口 凜、村川莉子、村田陽亮、百瀬美樹、矢田沙和子、山口侑紀、山科有良、米谷今日子、四方田錦子、和田幸子、渡邊早紀 ほか

発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL:03-5961-5202 <http://festival-tokyo.jp/>  
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)、小林 剛  
※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。

## Festival/Tokyo Organization Committee

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hiroshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuohara	Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.

## Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City  
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimaru, Arts Network Japan Director  
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City  
Committee Members:  
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section  
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation  
Masako Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation  
Naoko Hasuake, Arts Network Japan Representative  
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director  
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City  
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

## Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma  
Administrative Director: Naoko Hasuake  
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima  
Production Manager: Tomoya Takeda  
Production Co-ordinators:  
Chika Kawai, Oriie Kyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda  
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama  
Media Strategy: Kanon Matsumoto  
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanako Tamura  
Open Program: Sayuri Fujii  
Open Program Assistants: Suzuki Tanoiri, Takashi Ogo  
Ticket Administration: Rie Nagahara  
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyomyong Yoon  
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato  
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Ishishi  
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

## Technical Director: Eiji Torakawa

Assistant Technical Director: Chizuru Kuno  
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)  
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

## Art Direction + Design: Asy! (Naoki Sato + Kohel Nakazawa + Masataka Kikuchi)

Website: Shinichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (offwork Inc.)  
Public Relations: Masako Arita, Akihiro Mochizuki  
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews  
Merchandise: Jun Watanabe  
Editor/Writer: Rieko Suzuki

## Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Association for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)

## Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.

Supported by Asahi Group Arts Foundation

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEDANKYO

Special co-operation from SEIBU IBEKUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IBEKUKURO,

TOBU RAILWAY CO., Ltd., Sunshine City Corporation, Chaccott Co., Ltd.

In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association

Media Partners: ART IT, J-WAVE 81.3 FM, SHINKO, CINRA.NET, Blixtus Techo

Hotel Partners: Sunshine City Prince Hotel, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Sakura Hotel Ikebukuro

Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr

PR Support: Poster Harri's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013